東亞醫學

第八號目要目

癲の燒針療法　石原保秀
鍼灸と刺戟　柳谷素靈
鍼灸と按摩マッサージ　戸部宗七郎
特輯　刺鍼による内臓穿孔の數例　龍野一雄
蟲樣突起炎の症狀及診斷（承前）　龍野一雄
果物と砂糖と疾病との關係（一）　西澤生惠
支那長江餘滴（二）　龍軍醫中尉
ある往診　竹茹生
竹林雀語　竹中筍庵

◆投稿規定◆
讀者各位の投稿を歓迎す。
題目、内容は時事、學術、文藝其他隨意。
長さは一〇〇〇字以下とす。

漢方醫と處方箋發行問題

厚生省は近く醫師法に根本的改革を加へんとして、目下鋭意これが立案に汲々たりと云ふことである。而して改革案の一つに、處方箋發行問題が提議されてゐる。此の問題は所謂醫藥分業の名の下に、醫師會と藥劑師會との間に、飽くなき論爭をつづけられて來た、歴史的の代物であつて、現在では、醫師は患者の求めに應じて、處方箋を交附してゐるが厚生省案は患者が求めると求めないとに拘らず、醫師は診察と同時に必ず處方箋を發行すべしと云ふのであつて、多年に亙つて、藥劑師會の主張して來た强制處方箋發行と、その實體は同じである。

日本醫師會は、當然の成行として、厚生省案には反對の意志表示をしてゐるが、此際吾々は漢方醫の立場から、處方箋發行問題を論じて、當局の注意を喚起したい。

處方箋發行に先立つて吾々は先づ、吾々の使用してゐる漢方藥の規格を統一して、漢方藥を中心とする藥局方を制定することが、當面の問題であることを指摘してをく。巷間販賣の漢藥には、眞僞良否の混淆甚しく、處方箋による調劑が、醫師の期待に背く場合が頗る多い。吾人は嘗て處方箋を交附せる患者より、次の如き詰問をうけたことがある。『處方箋により近隣の藥局より調劑をして貰ひ、自宅に歸つて袋を開けてみると、先生から先日戴いた藥とは全く別です。どうしたわけですか』と。そこで患者の差し出す藥を調べてみると、處方箋通りの調劑であつて、別に間違つたわけではない。たゞ藥品が最下等品で、まるでゴミの樣である。この樣な藥では、なるほど味も異ふし、效力もない筈だと、つくづく患者のひろげた藥を眺め入つたことがある。

現在、藥劑師で漢藥の良否眞僞の鑑別の出來る人は多くはない。かゝる人達は、漢藥問屋から購入したものを、何の批判をも加へず、患者に投與してゐる。然るに漢藥問屋では、僞品を僞品と承知し乍ら賣つてゐるし、値段の安いのを喜ぶ藥屋へは、勢ひ下等品をうりつけることとなる。以上述べし如き、

品質の不統一

を無視して、處方箋を發行することは、全く無意義であり、危險である。漢藥として日常繁用せられる桂枝の如きも、下等品と上等品とでは値段に數倍の差があり、處方箋に、それを示して上等品を使用せしめる方法は、目下の處では見出せない。

支那では漢方醫は殆んど全部患者に處方箋を交附してゐる。患者は醫者から交附された處方箋をもつて、藥局で藥を調劑して貰ふのであるが、その際患者の貧富の程度により一日分十錢でも、一日分一圓でも、患者の注文に應じて、上等品と下等品とを夫々使ひ分ける現狀である。のみならず患者によつては、處方箋を檢討して、

氣に入らない處方

だと、又別の醫者にかかる。少し重症患者で、その家が金持ちであれば、數人の醫者を呼び寄せて、夫々處方箋を書かせ、その中で患家の氣に入つた處方箋を撰び、それで調劑を依賴するといふ段取りになるのである。

處方箋發行も、これでは何の權威もなく、醫師の治療も行はれ難い。

吾々は支那の漢方醫を見るにつけ、現狀の如き百鬼夜行の漢藥界を改革せずして、そのまま處方箋を發行することの危險を警告するものである。

結核豫防對策につき協會全員の協力を要望す

矢數道明

壯丁體位低下問題が眞劍に論議せらるゝ樣になつたのは、その大多數が既に結核性疾患にかゝつて居り、或は將來結核性疾患に罹病し易い、所謂筋骨薄弱體質者が、年を追ふて激增の一方を辿るといふ現實に驚いたが故であるといふ。

我が國未曾有の非常時局に當つて、人的資源の缺乏の時、有爲青年の罹病は、獨り本人活動力の消滅ばかりではなく、家族全員物心二方面の絶大無限の消耗は全く言ふも愚かな程であつて、まことに國家的一大對策の講ぜらるべきは既に當然なことである。

茲に於て軍部及び政府當局もその治療と豫防法の大々的對應策に乘り出し、曩には畏くも　皇后陛下より賜はりたる令旨を奉戴し、秩父宮妃殿下を總裁と仰ぎ奉りて財團法人結核豫防會が設立された。同豫防會は關係當局者指導の下に、幾多財界巨頭の援助を得て長與博士會長となり、我國醫學界の先輩諸士が協力して結核研究所を設立し、さてこれから諸多の調査研究を開始するといふことである。吾人はその研究の餘りに遲きを遺憾とするものであるが、爲すは爲さざるに優り、今からでも決して遲くはないとは言へぬが、將來の爲めである。然し乍ら茲に吾人が同豫防會の調査委員に望むところは、過去數十年間、絶えざる醫學の研究、衞生設備の擴充にも不拘、益々國民の健康狀態が惡化するといふ、この逆理が如何なる根本誤謬より出現するものであるかといふ、その根本原因の探究である。所謂机上學問の研究や、機關設備の增大には餘りに期待のかけられぬことはもはや試驗濟みなのである。その大本に於て誤謬があれば、研究すればする程、設備を擴大すればするに從つて千里の誤謬は更に萬里の過誤となつて現はれてくることに思ひを致すべきであらう。然らば過去五十年間國民の健康問題を鞅掌して來た治療醫學はその根本方針に於て果して當を得たものであつたか、我が國の氣候風土を無視した衣食住の問題は如何、肉體を左右するに重大な影響ある思想問題は如何、吾人は是等の諸問題に對して一策を献すべき必要に迫られてゐる。協會々員の協力を要望する所以である。

癩の燒針療法

石原保秀

鍼灸術の目覺しい復興に連れて近來種々の問題をも生じて居るやうであるが、樫田十次郎氏の「思ひ出話」（東邦醫學四月號）中に「上州草津では、癩患者が癩の出た皮膚を、灸で燒き固めて居る。病氣の爲め熱さを感じないから、ドンく〳〵すゑて居る。燒き固めると三年位は大丈夫だと言つて居た」とあるのは、最も私の興味を引いた一節である。

と云ふのは、私は曾て醫文學五の七號誌上（昭和四年七月）に、灸では無いが「癩風と燒針療法」と題して片倉鶴陵の特殊療法を略述した所、其次號には田中香涯氏が、同法は既に三四十年前、米獨等にも紹介されたものだと追加されたことを懷ひ出すからである。

詳細は同誌又は鶴陵の癩新書に就て御覽を願ふ方が便宜であるが、所謂癩の療法に至つては、相變らず大楓子油中心の療法か、乃至は切除、燒灼、腐蝕又は搔破等の範圍を出でない今日に於て、未だ之を追試したと云やふの報道を、耳にしたことが無いからである。

思ふに癩に對して、腫上を刺すと云ふ法は、簡單ながら靈驗に在り、燒針溫針のことは、傷寒論にも見え、又疽に對する火針の法は聖惠方や醫心方等にも記載されて居るが、更に醫談抄に據れば、我國では女醫博士丹波賴基が、始めて火針を應用したとある。併し惜しいかな後世其傳を失して、之を行ふ者が無いやうであつた。

然るに鶴陵は、之を羽の一隱醫に得たと云ふ醫生から、原幣で習得したと述べて居る。其事は暫く措くも、彼は「天下此病を治するの法、此術の右に出づるもの無し」と自畫自讃して居るのである。否當に鶴陵自身の推奬のみでは無い、幕末の名醫喜多村香城は其「續醫方啓蒙」に於て

『癩疾の一門は、片倉鶴陵の癩新書に載する所、頗る奇治にして效驗多し。余壯時多紀柳沾に從つて、其治療を親しく見たり。後友人小島學古、數人を治して皆癒えたり。今予傳へざれば、此法も亡佚するに庶し。因つて鶴陵の說に柳沾の言を參して茲に譯述す』

と述べて居るのである。

田中香涯氏に據れば、鶴陵の癩新書を泰西人に紹介したのは、紐育の醫家アッシメッドで、それがヘンニングに依つて、米國醫學會雜誌に抄錄され、此抄錄が更に獨逸醫事週報に譯載されて居るとの事である。即ち該抄錄に據れば

『紐育の人アルベルト・エス・アッシメッド氏は、東京の人ラタカラ（カタクラの錯誤）ゲンシウ（元周）と云へる日本醫が、一七八一年に公にしたる著書を、吾人に紹介した。この著書は癩病の原因症候及び療法を詳述したもので、就中症候に關する記述は最も詳細を極め、有名なる那威の癩研究家ダニールゼン及ベックの名著を讀んでも、復之に加ふる所が無い程である。癩の原因に就ては、元周氏は氣候の關係、酒精濫用、荒淫、脂肪食の過多の他、一種の昆蟲の體內に侵入するが爲に起ると云つた。されば元周氏は、シルリング氏（一七七一年）と同じく、而も相知らず相期せずして癩の寄生性原因說を唱へたものであると謂つてよい。

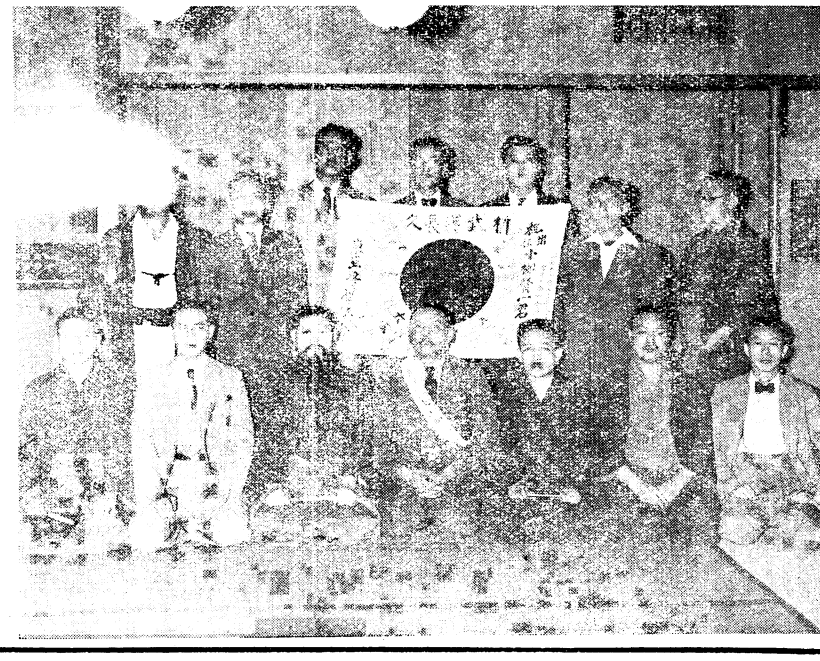
併し之等の所說よりも、尙貴重であるのは、元周氏の癩治療法である。と云ふのは今日に於ても、其幾分を實行し得べき價値を存するからである。故に稍々詳しく之を抄錄しよう』下略

私は茲に改めて、同療法家並に鍼灸家諸君に對し、更に一段の奮起を望んで已まない者である。徒らに其收容施設のみをあせつたり、公立療養所を速に國立にした所で必ずしも其根絶策だとは思はれないからである。尙本年三月十八日發行の醫事公論には龍野一雄學士の「文獻に現はれた癩病」と題する頗る貴重な記載がある、是非一讀せられん事を希望する。

小柳賢一君の出征を送る會

本誌編輯の小柳賢一君は去る日名譽ある召集を受け、敢然頗る元氣で出征した。寫眞は卽ち同君の壯行會で、日比谷松本樓に本協會の有志集つて盛んであつた。

前列向つて右より戶部、柳谷、大塚、小柳、矢數（道）、龍野、矢數（有）
中列大澤、相澤、阿久津、西山、
後列氣賀、西澤、龜岡の諸氏。



精繪　針灸經穴掛圖を紹介す

北京國醫砥柱社長楊醫亞氏より本協會宛針灸掛圖一部を寄贈して來た。掛圖は前面後面兩側面の四枚より成り、詳細を極め、經穴點にその經絡名稱の略字（例へば胃經なれば胃、三焦經なれば焦）を以て表現し、一目瞭然經絡經穴を理解せしめんとしたる努力の點は大いに賞揚すべきであらう。禁針、禁灸、孕婦禁針灸穴もそれ〳〵附號を以て現はしてゐる。研究家諸賢に推賞する。發行所、北京西域北滿沿三十號、國醫砥柱總社。

鍼灸と刺戟

柳谷素靈

只今の鍼灸は鍼を器械的刺戟、灸を溫熱的刺戟と取扱ひ、その生活體に運用する運用の仕方が窮極するところ Arntzulz の生物學的方則と大體一致すると考へられてをり、且つ鍼灸が Unstimmungsterapie であることや灸の蛋白體療法であることやはつまり鍼灸を Zeitsterapie と見るせいである。

事實鍼を身體内に刺入し、皮膚上で艾炷を燃燒するのであるから器械的刺戟若は溫熱的刺戟的療法であることには間違ひの無いところである。鍼灸はたしかに刺戟である、けれども鍼灸が單なる刺戟療法で、刺戟の强弱にのみその運用の基脚を求めてゐるものであると考へるならば大なる錯誤を來す源泉をそこに設けることになるのである。

何故ならば、體格のよいもの、肥滿してゐるもの、慢性のもの、男性、壯年者並に機能亢進（Hy-Perfunktion）に對しては體格の弱いもの、瘠せてゐるもの、急性のもの、女性、幼老者又は機能減退（Hypofunktion）に對するよりも强刺戟を與ふべきであると說かれてゐる。

このやうな教說は一讀して判然たる如く生體の内部に立ち入つて觀察でなくて、外面的な觀察に過ぎない、見かけのことを標準にして、實質の部分を等閑にする結果になるやうである。つまり洋方的な考察の仕方で漢方的な考へ方ではないのではあるまいか。

事實學者は次の二例によつてその然る理由の一端を說明することが出來ると考へてゐるのである。

第一例　體格良、身長六尺に近い肥滿してゐる、慢性胃カタルであまりひどくない、脈はやや弱い程度、腹力相當にある年齡三十五歲位の男性で、弘法灸の經驗がある。

この患者は上揭の分類から云へばどうしても强刺戟を與ふべきである、從つて穴を五ヶ所や十ヶ所撰穴したからとて何も異常狀態を起しさらに見えないのである。然し實際は左右の膈兪三壯左肝兪に灸三壯据え終ると顏面急に蒼白となつた。そしてグラ〳〵として倒れかかつたのである。即ち、腦貧血を起したのである。直ちに處置を施して蘇生せしめたが、かうした身體にどう考へても米粒大九壯が强刺戟とは考へられぬのであるが彼にとつては、强であつたのである。

この例から見て我々は實際と理論とは異ると輕く考へてそれ切りにして置いてよいのであらうか、決め置かねばならぬことである。

第二例　肋膜炎の患者、二十八歲で右肩胛骨下緣に當つて背部から、乳下部に疼痛がある。體格頑丈のやうに見受けられる、咳をしてもいたみが患部に響くとの事である。膈兪、大包、脊際皮膚鍼で痛みはとれた、そして不眠を伴つてゐるので次に弓柱へ鍼したらすぐ神氣朦朧として來たと云ふ、つまり腦貧血を起したのである。これも蘇生鍼を施して治したのであるが。

この二例で知つたことは我々が病人なる內的環境への注視を度外して外的な見かけ上のことによつてのみ刺戟の弱强を定める現代の鍼灸の運用法に深甚なる省察が加へられねばならぬと云ふことであり、實際と合致せぬ刺戟理論なるものは實は外見上の理論で眞の理論ではなく、むしろ鍼灸を運用する眞の理論は漢方的鍼灸の方則にあると言はねばならぬし、さう云ふ建前から立てられた治療方案こそ眞に事實と合致した理論であることが實際臨牀に日常を過す者であるならば誰れでも首肯するところである。

鍼灸と按摩、マッサージ

戸部宗七郎

結論を先に言ふならば「鍼灸と按摩マッサージとは分離せよ」と云ひ度いのである。時勢に依つて又其の眞價によつて益々世に頭角を表しつつある鍼灸と、一方按摩マッサージとが同等に視られ同じ規則に依つて取締まられてゐる事に非常な矛盾を我々鍼灸家は感じてゐる。

石原保秀先生の御研究にもある通り按摩とは古來按摩博士等の制度もあり、治病報國に盡されてきた事は事實であつて我々としても實際に其の治病效果に就いては一般世間の人々は良く認識もしてゐる積りでありこんな場合按摩を應用したらばなあと感ずる事も實に屢々あるのであるが、如何せん世間一般がかくは認めてゐないし、又術者も亦これを治病に應用せんとの努力をしてゐない現狀では仕方がないのである、鍼灸と按摩マッサージを同時に營業してゐる人々の鍼を指して、或は灸を指して世間ではあれは按摩さんの鍼だ、按摩さんの灸だあどうも、と云ふ具合に、てんで頭から信用してゐない、鍼灸はよいと思つても、これを行ふ人を信用しないと云ふ譯である。

「鍼灸もみりやうじ」と云ふ看板を吾々は巷間の隨處に於て見るのであるが、其の度に何やら鍼灸に對して暗影を與へられた樣な氣がしてならないのである。

按摩さんにしてみれば、按摩をしながら時にサービスとして鍼をして上げられると云ふ一つの營業繁榮の道具として用ひられるのであるから、誠に重寶、然も現今愈々盛んになりつつある鍼灸を景品にできるのであるから、これは是非共無くてはならないものであらう。然し景品はどこまでも景品であつて、これを受けた人々にとつては、鍼の價値を數段落して頂いてゐる次第であるから、

鍼或は灸を專門に治病を主としてゐる者に取つては全く迷惑千萬一方に於ては醫者と同等に或は其以上の吟持と學識を以つて、國民保健の爲に盡さんずばの意氣込でゐるにも拘らず、片方にてかく信用を落す事をやられてゐたのでは順調に擧げてゐる帆も又何日か降ろさねばならぬとも限らぬと憂慮せねばならないのである。

各地に於ける組合は何々鍼灸按摩マッサージ組合と稱して、各々目的の違ふ者を無理に集めて組合を結成してゐる、尤も實際は鍼灸を專門にやつてゐるものは極少數であるから、これでさしたる故障はないのであるが、鍼灸を專門にやつてゐて、世の鍼灸に關する認識を深める推進力となつてゐる人達は、この種組合へは入つてゐない現狀であり、又各地に於ける公認非公認の鍼灸學校は名前こそ鍼灸學校であるが、その殆どが按摩マッサージを同時に教授してゐる仕末である。これでは如何に鍼灸家が騷いでも其の分離は仲々容易でない仕事である。

然るに今回厚生省が鍼灸規則の改正を目ろんでくる樣になつたのは、凡百の物騷なる療術行爲を整理せんとする爲でもあるが、又日に月に勃興しつつある鍼灸醫學をして健全なる發達を期せしめて國民體位の向上に資せしめんが爲であると思われるのである。

世の按摩さんは言はれるかも知れない、何も自分は按摩計りしてゐるのではない、マッサージもやつてゐるんだ、と、そは、さりながら一般患者が果してマッサージ治療を受くる可く巷間の業者を訪れるであらうか。否それは全く曉天の星のそれの如く微々たるものである、マッサージの免狀を所持するものの先づ希ふ所は病院のマッサージ科へ入る事が常識となつてゐる、病院へ入らずしてはマッサージをマッサージらしく治療に應用する機會を與えられないのである。

筆者は尊敬すべき人格の所有者たる按摩さん、或はマッサージ家の何人かを知人としてゐる。そしてその持つ所の特技に就いては全く禁嘆を惜まぬ者である。さり乍ら現在の社會狀勢に於ては鍼灸と按摩、マッサージを漠然と一緒にしてをく事はその何れもの發達をも阻害するものである事を悲しむものである。

各自各々その特徵を發揮せんとせば○○を別ちてその道の爲に專心沒頭すべきものと思ふ。

斯く云ふたからとて、お互に他の術に首を突込む可らずと云ふのではない、各々の技を磨く爲の肥としての研究には鍼・按摩、マッサージに限らず何技であるとも努力しなければならぬ事は勿論である。

或る論者の言によれば、鍼灸は盲人に依つて衰えた、だから今後盲人には鍼灸の免狀を與える可からずとの事であるが、これは少しく認識不足と考へられる。盲人たりとも晴眼者に數倍する聰明な頭の持主もゐる事は歷史に徵するまでもなく、現在多くの達人のある事を吾々は指適する事ができる。

獨り鍼灸家に限らず、廣く世間を見渡せば、いいかげんな晴眼者なぞ足元へも行けぬ盲人があるのである。要は其の術の扱ひ具合である、從つて、現行の試驗の程度を高める事によつて、斯業の向上もあり、世間が吾々を遇する道も高くなり、從つて國民體位の向上も考へられるのである。この爲には吾々は再試驗をも辭せないのである。

この分離問題は大分以前から論じられてゐるのであるが、未だ實現を見ないのは、時勢がそこまで行つてゐなかつた爲でもあるし、永らくの因襲に依つてかくは自然に固くなつた爲である。然し今は時機が來たのである。この時この際をおいては、他にないであらう。鍼灸規則改正といふ絕好なチヤンスが到來したのである。現にこの機會を利用し鍼灸專門家の結成運動が開始せられてゐる。

あらゆる意味に於て、鍼灸は獨立獨步の方針の元に進まなければ吾々の求むる如き黃金時代の現出は不可能である。あらゆる摩擦、妨害は覺悟の上である、數は勿論激減するであらうが、鍼灸を愛し鍼灸の眞價を顯現せんと希求するの士は堅き團結が、絕對必要である。堅き團結は同じ目的同じ利害を有する同志でなければ不可能である限り、斷乎としてこれに向つて邁進しなければならないと考へるものである。

蟲樣突起炎の症狀及診斷（承前）

龍野一雄

オルトネルによれば蟲樣突起炎と鑑別を要すべき場合のある疾患は頗る多いが、矢張り主に發熱と右下腹部の疼痛があるために紛はしい疾患が擧げられてゐるのである。

四六　パラチフス　廻盲部に突然劇痛筋性防禦を起し嘔吐を伴ひたる例を見たり。

四七　流行性耳下腺炎に引續き右側急性睾丸炎を起し腫脹せる睾丸を蟲樣突起周圍炎性の浸出物かと思つた。又流行性耳下腺炎に引續き起れる急性卵巣炎と鑑別を要した例もある。

四八　急性膀胱周圍炎　最初廻盲部に在つた蟲樣突起周圍炎性の化膿竇があり小骨盤腔に流注して疼痛性の尿意頻數を起した例がある。

四九　結核性腹膜炎

五〇　盲腸周圍炎

五一　急性輸尿管周圍炎　輸尿管結石等のために輸尿管が穿孔し廻盲部に劇痛を伴ふ化膿炎の腫塊を作つた例あり。

五二　盲腸官靜脈炎で蟲樣突起炎そのまゝの症狀を呈したことあり。

五三　横隔膜側の肋膜炎

五四　クルップス性肺炎

五五　急性脊髓前角炎等で廻盲部に疼痛現象を伴ふことあり

五六　攝護腺炎

五七　ヒステリー性假性蟲樣突起炎（龍野云ふ、蟲樣突起炎恐怖症とも言ふべき頗る神經質な患者には屢々遭遇し苦笑させられる）

五八　淋巴腺性假性蟲樣突起炎

五九　寄生蟲性假性蟲樣突起炎（龍野云ふ殊に蛔蟲で急性蟲樣突起炎の症狀を呈するもの多し）

六〇　腸腰筋炎

六一　腹部の紫斑病ウエルホーフ氏病

六二　腎盂炎

六三　腎膿瘍

六四　化膿性喇叭管炎

六五　脊髓後根の刺戟　下部の肋間神經の刺戟でも起る。例へば脊椎骨折、脊髓膜出血等によるものである。

六六　盲腸、横行結腸、小腸廻腸、胃の破裂

六七　猩紅熱で蟲樣突起の淋巴濾胞が腫脹した結果疼痛を起す。

六八　腹部又は鼠蹊部睾丸の壅捻轉

六九　黴毒

七〇　大網の捻轉

七一　卵巣囊腫の壅捻轉

七二　腸間膜淋巴腺結核

七三　腸チフス

七四　盲腸の過度伸展

七五　胃潰瘍

七六　輸尿管炎

七七　腸性蕁麻疹

七八　廻盲部淋巴腺化膿

七九　腸血管の閉塞

八〇　盲腸軸轉捻

八一　大網捻扭

八二　遊走脾

八三　遊走腎

八四　横隔膜ヘルニア

八五　鉛毒性疝痛

八六　盲腸蟲樣突起の癌腫

八七　膽囊炎

八八　膽石症

八九　腸閉塞

九〇　血尿　慢性にして再發する廻盲部痛と腰痛を伴ふ血尿—例へば腎結石、腎結核等の場合

九一　黄疸

九二　月經痛

九三　破傷風

九四　後腹壁性腫瘍

九五　アセトエミー性嘔吐と慢性蟲樣突起炎

九六　慢性便秘と同右

九七　キンケ氏の浮腫の時廻盲部に疝痛發作起りし例あり

九八　上腸間膜動脈硬化症で週期性の疼痛が廻盲部に恒在して現はれることあり

九九　脊髓癆

一〇〇　廻盲部アクチノミコーゼ

一〇一　粘液性結腸炎

此外にもまだ若干鑑別を要した經驗があるけれども、實際問題としては手術又は病理解剖所見によらざれば判明し難い場合が尠くない。オルトネルの豐富な經驗を他山の石として我々は極力誤診を避けるやうに努力すべきである。右下腹部が痛むと患者の方で蟲樣突起炎ではないかと自ら疑つて診斷を求めに來る場合が近年では多くなつたが、充分精査しないで患者の言に迎合するのは無論惡いし、反對に實際蟲樣突起であるものを他の疾患と誤診して蟲樣突起炎ではないかと念を押したのにあの醫者は誤診したなど不評を蒙らないやうに細心の注意を拂ふべきで、疑はしい場合には少しく經過を觀察するか經驗ある他醫と相談するか、重い方の病氣を考慮して適宜の處置をとるなどして手ぬかりなきやうにせねばならぬ。

發熱の程度は病の重さと必ずしも平行はしないが、漸次體溫上昇し局所の所見も擴大するのは腹膜炎への警戒信號とせねばならぬ。

悪寒は伴はぬことの方が寧ろ多い。

發汗も大黄牡丹湯の證として擧げられてゐるが殆ど經驗したことがない。

脈搏は浮大のこともあり緊數のこともあり滑數のこともあり、反つて軟きこともある。腹部所見その他が充分大黄牡丹湯證を思はせるに拘らず、脈が軟で之を無視したゝめ一時增悪し薏苡附子敗醬散で頓挫的に恢復した例もある。傷寒論の不可下の編を見ると浮而緊浮大の脈は下すべからずといふけれども必ずしも拘泥しなくてよいやうだ。然し大黄牡丹湯を組成する藥物中表へ行くものは一もないから右の樣な脈の時には他の症狀を精考した上注意して瀉下すべきである。又餘り頻數の時も腹膜炎の擴大を警戒して輕々に攻めてはならぬ。

白血球は一—二萬位の時はカタル性或は出血性變化で止まつてゐることが多いが、二—三萬となると壞疽性又は膿瘍形成、時には透壁性腹膜炎の將來性が強くなる。但し白血球數だけでは局所の變化の豫想は決定的でない。必ず局所々見と照應して考ふべきである。白血球數と湯液處方との關係は未だ確認し難いが、私は白血球が一萬數千になつても大黄牡丹湯で瀉下して奏效した經驗を持つてゐる。

赤血球沈降速度も速くなるが矢張り湯液の證の中には數へ難い。

消化器障碍として初期に嘔吐を催すことがある。その時期には大黄牡丹湯が行くことは少くむしろ柴胡劑が用ひられる機會が多い。傷寒論の不可下編にも病欲吐者不可下、傷寒嘔多、陽明證有りと雖も之を攻むべからずといふやうに病毒が吐によつて上に排出されやうとしてゐる際にわざ〳〵反對の方向たる瀉下を行ふには當らない。先づ胸脇をくつろげて次に機を逐ふて瀉下すればよい。腹膜炎が擴大して來て腹膜刺戟症狀の一つとして來て嘔吐が起るやうになれば無論瀉下してはならぬ。要するに嘔吐のある際は輕率に下すべきではない。

多くは便秘勝ちで稀に下痢を伴ふこともある。鼓腸は多く腹膜炎の進行せる場合に見るもので、時には麻痺性イレウスを併發し高度の鼓腸と吐糞或は吃逆を起すことあり、豫後は絶對に不良である。

ドーグラス氏窩を肛門より指頭にて觸診するのは内科醫の兎角怠り勝ちなことであるが、局所の病理解剖的變化を考へ、膿瘍の存在を確めた上に甚だ參考になるから盲腸周圍膿瘍を形成せる疑ひある時には是非檢査しておく必要がある。ドーグラス氏窩膿瘍によつて血便、下痢、尿意頻數等を起し他の疾患と鑑別を要する場合が起つて來るのは前掲オルトネルの經驗によつても明かであらう。

述せる所と多少重複するかも知れぬが、病理解剖學的變化と臨牀所見との關係を略記すると

カタル性變化　發熱、脈增加、白血球數、筋性防禦等左程著明でなく、腫塊も餘り著明でないが時には示指頭大位に腫脹してゐることもある。嘔吐さへなければ概して大黄牡丹湯のやうな下劑が適用される。

出血性變化　進行及び症狀が劇合に急劇で時には大黄牡丹湯を受付けぬことがある。

壞疽性變化　症狀が劇しく腫塊も大なるものを觸れる。白血球數も無論多い。大黄牡丹湯は注意して用ひなければならぬ。自信がなければむしろ四味の腸癰湯を以て經過を觀察した方がよい。

蟲樣突起周圍炎　限局性に漿液性又は薄い膿性のこともあるが、多くの場合筋性防禦が頗る強く深部の觸診が困難である。そして治療により筋性防禦がとれて來ると始めて大きな腫塊を觸知することが多い。腫塊の大きなものは大網の包繞か又は著明な膿瘍である。筋性防禦が強い場合にも強く瀉下するのは慎重であれ！

急性化膿性腹膜炎がラップ氏の四角形を越えて擴大して來ると症狀は油斷が出來ない。多く著明な定型的腹膜炎症狀を呈して來て體溫上昇、筋性防禦の擴大、脈細數ヒポクラテス樣顔貌、腹痛、鼓腸白血球增加と症狀が揃つて來ると地獄の一丁目である。無論瀉下は嚴禁で附子劑が行く場合が多い。

膿瘍形成は發熱狀態と大なる腫塊とにより先づ疑ひを置くことが出來る。然しその所在は極めて多岐で、盲腸周圍膿瘍であることが最も多く、その位置は盲腸後部、腹膜部、筋膜後部等種々あり、時には横隔膜下膿瘍、骨盤膿瘍、左側腹部膿瘍、ドーグラス氏窩膿瘍等一樣でない。概して溫劑が用ひられるが然し症狀を精査して之に拘泥してはいけない。

慢性蟲樣突起炎は硬結だけ殘つて容易に縮小しないことがある。他の硬結を作る疾患と鑑別を要し治療は瀉下によき場合と反對に溫劑によき場合とある。私は烏頭桂枝湯を用ひ輕快せしめた例を持つてゐる。

蟲樣突起炎は是迄數回に亙り述べし如くその病理解剖學的變化、症狀類症鑑別が多樣にして且つ進行が速かな上、處置を誤れば豫後を不良ならしめ將來性が多分にあるから、その診斷は最も慎重なるべく、その治療は最も熟練を要することは言を俟たない。大黄牡丹湯若くは腸癰湯若くは騰龍湯だけを知つて能事了れりと觀ずる位危險なことはない。幸ひ私は今日までに一名の死亡者も出さず、手こずつて手術せしめた例はないけれども、時には苦心慘憺した經驗も無論持つてゐる。

漢方醫學の全體が判らなければ一蟲樣突起炎は直せないし、大黄牡丹湯の使ひ方が判れば漢方の全貌も亦攝めるであらうと常々痛感してゐる次第である。やれば遣る程難かしいといふのが最近の私の僞らざる感想である（此項終り）。

ある往診

竹茹生

○

漸く捜し當てた患家のガラス戸は、ひどく歪んでゐてなか〳〵開かなかつた。土間に立つて幾度か案内を乞ふたがいつかな返事がない。六月下旬のひる下り、その日の暑さは格別で、全身ヂットリと汗ばむだ。軒下のドブ川に眼を落すと、爛れから滲み出す臭悪の分泌物の様な下水が少しも動かずメタンガスの泡がブス〳〵と不平らしくつぶやいてゐる。龜戸六丁目水神森の裏街、露路奥の長屋である。駄菓子を舐りながら歸つて來たこの家の幼兒の後について構はず二階へと上つた。

○

患者はこの家の主人公で三十七歳、彼の經歴については以下彼をして語らしめやう。

『私はまる十二年間足尾銅山に鑛夫として日の目を見ずの生活を送つて來ました。鑛夫の生活は亂暴です。毎日隋分酒も飲み、無理もしたのです。大ていの人は身體が續かず四五年で廢めて終ふ樣ですが、私は至つて丈夫でした。身體の工合の惡くなつたのは一年程前で、どうにも堪らなくなつて東京へ引き上げて來たのは今年の五月です。先達市の健康相談所へ診察を受けに行きますと、肺結核でもう助からない、家に居てはいかぬから入院するがよいとの事で城東區の○○病院へ入院させて頂く事になつたのです、丁度小學校の教室の樣に廣い病室へ私は一歩足踏み入れた時、一通り見渡した同室の患者は皆んな骨と皮ばかりで、その顏色は白蠟の樣に生ける人とは思はれません。私は愕然としましたが、退くに退かれずベットに就きました。その夜はまるで墓場で骸骨と一緒に寢た樣な氣持でさんじりともしませんでした。夜に日を繼いで起る咳嗽喀痰の連發、呻吟悲鳴の聲、私も日に〳〵衰へて憐りの人と同じ樣になつてくる氣がしてならないのです。耐えに耐えた一週間、相當良い體格だつた自分がみる〳〵瘠せ衰へてくるのを知つて、もはやどうしても我慢が出來なくなつて來ました。どうせ死ぬものなら家へ歸つて死にたいと一心に思ひつめた揚句、願ひ出ててもは歸してはくれぬとのこと故、丁度三日前の夕方です、便所へ行くと稱して蒲團のまま飛び出し裏門から夕闇にまぎれて逃げ出しました。凡そ一里半以上でせう、喘ぎ乍ら家へ辿りついた時の嬉しさは格別でした。もうこれで死んでもよいと思ふた位です。どうせ諦めた身體ですが、親戚で頻りに奬めてくれるのでお出でを願ふた樣な次第です』

○

妻女のそそぐ湯冷ましに口を潤しつつ時々咳嗽の發作に遮られ乍ら、患者は東北辯も露骨に、右の物語りを終つた。脈は浮數で力がない、體溫は三十八度五分であつた。嚔がれた乾咳が少しの間を置いては發作的に襲來し、最後に濃厚な喀痰を喀出すると、稍々落着く。胸痛、盜汗、咽喉痛、食慾不振。之を聽診すると左側全面に乾性の罹音があり、諸處に濕性のラッセルが聞える。打診上濁音はあまり著明でないが、先づ以て全治の希望はないであらう。

聞けば家族は妻女の外に五人の子供があつて、この三疊と六疊の二階に寢起してゐるのである。子供達の顏色も皆蒼白だ、破れた障子、崩れた壁、蝕まれゆくこの一家の中央に坐して、私は診察の結果を決裁斷言せねばならぬ。紹介したといふ親戚の人は可成りの大病が治つたので、この醫者の藥をのめば必ず治るからといふ手紙を寄せてゐる。患者は枕の下からその手紙を引き出して示した。さあどうでせうかといふのである。

○

喝！　決然必治を告げると、患者の顏色は遽かに輝いた。最少限度に負擔を輕くしてやつて最大限度の注意を與へ、家族の喜ぶ樣を後に患家を辭した。心底に蟠まる割り切れざる現實の惱みを覆ひ隱しつつ、何やら義俠のほこらしさに似たものを覺えつつ、江東電車に乘込むだ。此の地特有の反動思想的騷音が空一杯に擴がつて、灰色に曇る。

私は初め回春の清肺湯、次に麥門冬湯に轉じた。經過は順調に進み、熱はなくなり、食慾は出で、幾分肥つて來たといふ。一週間毎に妻女の病狀を報告する東北訛りの電話を聞く度に、一體斯うした病人を如何にすべきかといふ大きな問題に責め立てられてゐる。いつも私は何やら成さねばならぬ負債を持つた樣で、又課せられた宿題を果たさずに寢るときの樣な氣がかりに捉えられるのである。

竹林雀語

竹中筍庵

○その昔、吉益東洞といふ豪傑醫者は『天下の醫者を治療』する志を抱いて、安藝の國から京都に出で、古醫方を唱へた。然るにその志の大なるに比し、患者は寄りつかず、入門の子弟もない。止むを得ず裏通りの長屋で、人形を作つたり、張子の虎をこしらへたりして、糊口をしのぎ、傍ら傷寒論を縱横無盡に研究して將來天下に雄飛する礎を築いたものだ。彼が後年、吉益流の名の下に天下に覇を唱へ、門弟千人と稱せらるに當り、一大私塾の建築を計畫し、その資金を儲けんがために、相場を張つて失敗し、家財を蕩盡したことは、吾々にとつて參考とすべき點が多い。調子のよい時が、危ぶない時だ。張り子の虎をこしらへて、時の到るのを待つた東洞ですら、調子に乘つて、つまづいたのだ。吾々は漢方の復興といふ、かけ聲におどつてはならない。漢方醫も、鍼灸も、もつと地味な研究に沒頭する樣でなければ、斯界の將來は思ひやられる。

十年二十年とかか、つても花も實も結ばない仕事があるのだ。この仕事、樣の下の力持ちともいふべき地味な仕事に身心をぶち込む底の人物が出て來なければ、漢方醫學は退歩するより外あるまい。

○漢方を嚙ぢる人間は、此頃どんどん增加してゐる。ただ裸一貫で漢方に沒入する底の人物がゐないのだ。病氣が少しうまく癒せる樣になると、そこで讀書や思索を放棄して、大家になつてしまふ。江戸時代には傷寒論の讀めない漢方醫が澤山ゐたが、今日でも傷寒論の讀めない漢方醫がゐる。

○中西深齋は東洞門下の逸足であるが、患者のよりつかないことで有名であつた。彼の著傷寒論辨正は彼が三十年間の苦心研究の結果である。世人が『寂々寥々中西居年々歳々傷寒論』と贈した程であるから、彼の生活がどんなものであつた、か思ひやられる。筆者は昭和の今日、深齋にも比すべき特志家の存在を知つてゐる。この人達が將來、百年後の漢方醫界に寄與する處は甚大であらうと思ふ。

○ひぐらしの鳴いて寂しき二人かな

林の中の彼氏と彼女氏。話しても話しても話しはつきない。その中にひぐらしが鳴き始めた。あれ、もう夕方になつてしまつたと二人は寂しがるのである。漢方研究家諸君、くだらないことに時間をつぶさないで、ひぐらしの鳴き始めない中に仕事をどん〳〵と運ばさうではないか。

東亞醫學協會指定

和漢藥專門
高島堂藥局
東京市本郷區本郷五ノ五
電話小石川一六五七番
振替東京二五九五三番

和漢藥專門
牛黃丸本舗
紀伊國屋藥店
土田梅吉
東京市神田區花房町二
電話下谷五七番
振替東京三〇八〇五番

和漢藥專門
小島七五郎
小石川區原町十二

江州屋藥局
藥劑師　吉田一郎
埼玉縣深谷町本町
電深谷三一六番
振替東京八一四五番

和漢藥種問屋
植木萬策商店
振替東京二八二一一番
振替大阪五二〇二三番
振替小樽一二四六二番
神奈川縣二宮局區內井之口

支那長江餘滴（二）

中支派遣××部隊
軍醫中尉　龍精

（E）泥醉者

支那に於ては所謂泥醉者と覺しき者は日常目擊されない、在支五十年と謂ふ邦人の話に依れば、支那に於ては所謂泥醉者は殆ど見られない、五十年の今日迄、目擊したのは唯々一回であつたとのことである。

（F）早寢早起

支那人は概して早寢早起きの善い習慣を持つてゐる、從つて保健衛生上にはこの點大いに興つて力があることであると惟ふ。

◈衛生設備（又防疫設備）と對病抵抗力

地球上の凡ゆる人類には大なり小なりの文化を夫々持つてゐる、而してこれらの文化を產み出す要素は單一なものではなく、多數の要素からなつてゐるものである。從つて、その物質科學なるものは僅にそれらの要素中の一つに過ぎないものであつて全てでは決してあり得ない。

「機械は人を殺す」とは古來から言ひ傳へられて來た處の格言であつたが、今日、地球上に於ける所謂文明國と稱せられてゐる國々は多くは物質科學的に發達して來た國であると謂はれてゐる。成る程物質科學は人間生活協體には必らずしも不要なものではないが、極端に趨り過ぎた場合は却つて人間生活協體を不知不識の間に破壞に導くこともあらう。或る觀點からすれば既に歐米諸國は物質文明的に行き詰りに到達しつゝあるのではないかとさへ言はれてゐるやうである。現代歐米流醫科學の論法に據れば、病氣なるものゝ原因は多くの場合、病原菌のために生ずるものであると謂はれてゐる。從つてこの病原菌を撲滅しさへすれば、健康そのものは永く保持されて行くものであると考へられて來た。なる程人體外に存在する病原菌を試驗管内に入れて之れを撲滅するためには、劇毒藥物其他の方法を以つてすれば完全に殺菌し得ることが出來るであらう。然し既に生活體内に潛入してゐる病原菌に對しては必ずしも容易には殺菌し得られないであらう。寧ろ該病原菌が殺菌される以前に生活體が毒殺されて了ふかも知れない。よし生活體が毒殺されてしまはない迄も、之れがために尠からず弊害を生活體内に胎こすことになるであらう。從つて歐米醫學は概して衞生防疫方面によく發達して來たやうであるけれども、治療方面に於ては却つてその發達がこれに伴はなかつたやうにも考へられる。從つて若し防疫設備或衞生設備が完全になれば、永久に人間は罹病しないと言ふやうな獨斷に捉はれ過ぎて人間は個人養生に對する關心度が薄らいで行く結果、個人對病抵抗力が、逐次減衰てし行くことになるのではないかと考へられる。

◈文明國人の驚異

支那の衞生狀態を觀て一番に驚異を感ずるものは、何んと言つても所謂文明國人と稱せられる外國人である。嘗て一外人が上海の○○○上に於て喀痰を檢査した處が多數の結核菌の存在してゐることを發見して驚いたとのことである。又一外人は、支那に於ては外見病人らしい商人が隨分と多いが皆營々として活動してゐるのを見て驚いたとのことである。

斯くして此等の外國人達は、この原因は如何にと研究して觀たが全然解らない、結局、支那人は體質が違つてゐるのだらうと言ふことで終つたとのことである。この事は外國人の文獻にもあり支那人の文獻にも記載されてゐる。筆者は嘗つて某中醫士の書物を見たのであるが、次の如く記されてあつた。「成程支那人中には結核患者は尠からず居るが、この死亡率は所謂文明國人に於けるそれよりも遙かに小である」との事が果して事實であるとすれば、洵に興味あることではなからうかと惟ふ。

四、診療

◈醫士藥房患者

支那人は一般に罹病すると先づ中醫士の門を叩くのが常である。中醫士は診察が終れば患者に處方箋を渡すのである。次に患者は處方箋を持つて其土地にて最も信用の厚い藥房に到り所定の藥劑を購ふ。若し患者が藥房から、さ程優良ならざるものを與へられ、それがために病狀輕快の度が捗らない場合があつても、決してその醫士を罵らない。寧ろ患者自身が惡かつたと言ふて諦めて了ふのである。

寔に醫士と患者との間には信賴と禮讓との精神が溢れてゐるやうである。從つて支那人は一旦罹病すると醫士と藥房との撰擇に極めて熱心である。

◈支那に於ける平均診察費（但治療費藥費を含まず）

中醫士の場合最低料金參圓位
西醫士の場合最低料金五圓位

◈支那人は診療費を吝まず

支那に於ける一般診療費は彼等の日常收入額に比して極めて高價に見える。それにも拘らず吝みなくこれを支拂ふ美風がある。例、一日平均收入が三十錢、四十錢と言はれる苦力と雖も、若し一度罹病すれば吝みなく診療費を支拂ふのが常である。蓋し支那人は概して「病氣→醫士→藥物→恢復→健康」と言つたやうな關係を深く認識してゐるやうである。そのかはり平常健康な時は努めて質素で無駄費ひもしない、質朴な生活をしてゐる。この點につき吾人は大いに敬愛すべきではなからうか（眞の意味に於て）と惟ふ。若し反之單に診療費が安ければよい、安ければよいで「藥劑の原價」のみに目標を置いて大切な「病氣—醫士—藥物—恢復—健康」と言ふ實態を度外視する人がありとせば洵に寒心に堪へない譯である。

五、中醫士、西醫士に對する患者の信賴度

支那人は一般に罹病すると中醫士に診を托するものが大部分である。內科小兒科婦人科方面に關する限りは中醫士に據る治療效果の方が西醫士のそれよりも斷然優秀であると言ふ事實を古來知悉もし體驗もしてゐるのである。かの孫文○○○等の如き國府要人大官すらも必ず一度は少くとも中醫士に診を乞ふてゐるのである。このことは色々な支那人の書物に記載されてゐる。況んや中、下產階級のものは猶更多いことは、自明である。由之觀之支那に於ける中醫士の數は、現在全土に於ける醫士總數中約九三パーセントを占めてゐる。今日西醫學治療が隨分進歩したとは雖も、未だ僅に一分野に止まつてゐるに過ぎない。支那に於ては西醫治療は內科小兒科婦人科方面に關しては、今日迄のところでは未だ中醫治療に及ばないこと遙かに遠いと言はれてゐる。外科方面に關しては、支那人は一般に中醫士、西醫士の孰れにも相半ばして診を乞ふてゐる。支那に於ける外科的疾患としては所謂小外科程度のものである。而して內臟外科の如き大ものはない、何んとなればそれ以前に中醫士に據り既に內科的治療を施して貰つてゐるから殆んど見られないと言はれてゐる。筆者は嘗て日本に留學し歸國後西醫として開業してゐた一支那人に訊ねたところ、彼曰く支那に於ては西醫士は多く外科を專攻したものが多い。然し開業してもなか〳〵生活は容易でない。內科を專攻した西醫士は殆ど官吏となり衞生防疫方面に活動してゐる位である。と言ふことである。花柳病、皮膚科の程度のものは中醫士、西醫士共に相半ばして活躍してゐる

六、

大陸に於て中醫々療の發達せし理由

1、歷史的に古來研究されて傳承して來たこと。
2、民情に克く副ひ患者の心持ちにも克く迎合してゐたこと。
3、診療は經驗的であり且實際的で效果も多いこと。
4、危險性皆無であること。
5、診療費は極めて安價であること。

七、

大陸に於て西醫々療の發展せざりし理由

1、歷史的には未だ日猶淺いこと
2、民情に副はない點が多いこと
3、診療は餘りに理論的であるが效果が之れに伴はない。
4、就中效果としては僅に防疫、小外科方面に過ぎないこと
5、危險性が多分にあること
6、診療費の安價でないこと

八、歐米系西醫士の發展せざりし理由

彼等は多く本國政府或は本國の社會團體から每年多額の補助金を受けながら支那各地に治療機關を設置して來たものであるが、經濟的には餘り芳しい方ではなかつたやうである。僅に○○政策の目的に於て意義があつたやうである。即ち各地に所謂ミッション組織の教會、學校、病院等を經營してゐたに過ぎなかつた。然しそれらの努力に較べて實際的治療效果は餘りにも擧らなかつた支那人患者の期待に副はなかつた（反之支那全土に亙り旺んに活躍してゐた中醫士の方が何んと言つても實際的治療には實績を擧げてゐた狀態であつた。

九、日系西醫士の發展せざりし理由

支那大陸に於ては日系西醫士は殆ど見るべき活躍はなかつた。僅かに在支邦人中の患者のみを扱ふ程度のものであつた。加之醫士の數も少なく財力に於ても亦非薄にして全く個人的經營に過ぎなく、この個人的經營も政變に續くに政變の支那政府のために屢々「排○抗○」の波動を蒙らねばならなかつた、猶又日系西醫士の悉くは純歐米醫學を修得した醫士のみであつて何等支那古有の醫療に對して一掬の理解さへなかつたやうである、

十、結語

(1) 抑々凡らゆる事物には悉く特殊性、普遍性、全、個等の如き諸要素を抱含してゐるものである。然るに一般に科學と稱せられるものは凡らゆる事物を思考する便宜上、かうしてこれらの特殊性、普遍性、全、個の中から一つをのみ採り出し、これを以つて唯一の思考方法として來た傾向が餘りにも多過ぎたやうである。即主として事物の普遍性のみを把握して之れに對應する普遍性の手段方法を講

（六）

じて來たやうである。從つて普遍性の手段を以つて事物の特殊性をも一率にこれを律せんとする傾向が多分にあつたやうである。

「健康保持」に對する歐米流醫學の思考態度も亦主として普遍性の一方にのみ落ちて了つた、觀がある。然るに「健康保持」に對する支那醫學の思考態度は前者と遙かに異なり、特殊性、普遍性、全、個等の綜合的思考に據り軌道を快走して來たものである。就中特殊性分を把握する點に於ては、前者より遙かに長じてゐた。その結果今日では歐米流醫學は防疫方面に於て發達し、支那醫學は個人治療方面に於て發達して來たものであるとも見られる。

蓋し吾人は二つとなき生命あるこの個人の「健康保持」を希求するならば須らく愼重にして且つ錯誤なからんとする態度こそ常に最も必要なことであると思ふ。

(2) 將來いやしくも支那大陸の醫事衛生に關して論ぜんとするものは、古來長江、黃河の流れ止まない實態と古來多大なる貢獻を支那國民に與へ續けて來て今猶止まない支那醫學の實態とを靜に省みることは徒事に非らずして最も肝腎のことであると惟ふ。

（完）

果物と砂糖と疾病との關係（一）

西澤生惠

果物、砂糖は體質、病症、時處位により、攝取する量が多いか少ないかによつて吾人の心身に毒藥とも良藥ともなるものである。今、實驗と學理の上より皇漢醫學的にその大要を素人にも譯り易き樣に申述べて見たいと思ふのである。

果物と云ふても、みかん類、梨、りんご、杏、桃、びわ、バナナ、パイナップル等々多種多樣で各々成分と作用が少しづゝ異なるものであるから、本草綱目の如く、各々の氣味等を記述すべきが至當であると思ふのであるが、徒に繁にわたり專門的知識を有せざる人には反つて理解が困難ではあるまいかと思ふので、こゝでは總論的の法を申述べ、實質的に速やかに疾病除去の一助に資せんと欲する次第である。

現代西洋醫學では果物は食慾をすゝめ、消化吸收を助け營養即ち各種のビタミンを補給し血液並に淋巴液の循環を可良ならしめ新陳代謝を旺盛にして血液を清めるものであるから、人體には非常によいものである云々等と稱して病人に（體質病症のわけへだてもなく）推奬して居る傾向がある。之は西洋の唯物的な一方的な見方から見ればあながち間違也として否定する事は出來ないのであるが、誰にも、何時でも如何なる病症にでもこの理があてはまるものではないのである。これは或一定の體質病症（例へば皇漢醫學的に云へば陽實症の如き）にのみあてはまる理であるのである。

さて然らば果物類は如何なる作用を有するものであらうか、即ち『果物類が人體內に攝取される時は組織細胞を弛緩せしめ體を冷やす作用があるのである。尙換言すれば遠心性の活動を發揮して陰の作用を成すものである』次に砂糖の作用を併せて述ぶれば即ち『砂糖類は果物類よりも速やかに强烈に遠心性の活動を發揮して陰の作用を成すものである。尙換言すれば體熱を放散し、組織細胞を弛緩せしめて體を冷やす作用が多大である』

然るが故に陰虛症の病人には果物類、甘菓子砂糖類等の陰の作用を成すものは絕對に禁食せしむべきである。然らざる時は炎症或は皇漢方の濕補藥を服用して一時的に陰陽の平衡狀態に近からしめざる限り、つひには死の轉歸をとる事火を見るよりも明かである。陰虛症の病人がみかん類や梨バナナ等の果物を食して急激に惡化したり死の轉歸をとつた實例は枚擧に暇なき程であるが、その實例を長々と例記する時は徒に貴重な紙面を費やす事になりはしまいかと思はれるので、これは略してたゞちに健康人が果物類や砂糖類を過食せし場合は如何なる疾病にかゝるかと云ふ事の大要を申述べて見たいと思ふ。

果物類や砂糖類は前記の如き作用を成すものであるから他の食物即ち求心性の活動を發揮して陽の作用を成す食物と十して果物類や砂糖類が過ぎて陰陽の調和がやぶれ、陰過剩となり內傷や外邪にわざわいされて陰病が生ずるのである。この時、體質や病症に適合せざる果物や、甘菓子砂糖等の陰の作用を成す食物が多ければ多い程、陰病は愈々進行して代償機能が減退するに至れば、遂には、手足が冷えて活氣なく、皮膚筋肉は弛緩して抵抗力減弱となり拔毛は多くなり、心臟は虛性肥大を起して衰弱するに至る。且又胃腸は弛緩し、消化吸收力は減弱し風邪引き易くなると共に肺病、近眼その他種々なる疾病に冒され易くなるのである。他方「精神的方面」に於ては漸次注意力が散漫し來り思考力の減弱となりつゝ眞の精力、根氣、記憶力が減退するに至り意志薄弱にして浮薄雷同的な軟弱たる思想の囚となるものである。幸にして高邁なる達識を有する父母や師の恩惠により健實なる思想の所有者たる者もこれが爲に實行力や能力の不足をなげきて所謂自らジレンマに陷り神經衰弱的症狀を呈するに至るものである。

げに、果物、甘菓子、砂糖の過食は貴重なる人命を削る鉋であると云はなければならない。砂糖は砂糖キビや砂糖大根等から作られる事はよく人の知る所であつて、黑砂糖はカルシユウム、鐵分等の無機成分が含まれ少量の攝取は人體に有益なるものである（攝取量過ぎれば腹中に蟲がわく）事は割合に知つて居る人が多い樣であるが精製せる白砂糖は特に甚だしき害毒を有するものである事を知る人は少ない樣である。

白砂糖は人體に有害なる漂白藥を使用して脫色したものが多く更にこれを一層美しく綺麗にする爲に、羽二重等を眞白に染める場合に少し靑色劑を加へると白色が一層目立つて美しくなる所の靑色素（人體に有毒物）を砂糖に加へるに至つた。然るが故に人體を傷害する作用は愈々增加するに至つた。

（以下次號）

東亞醫學協會九月例會

國民體位低下、人的資源問題の焦點として、我が國醫學界の大問題たる

肺結核の治療及豫防對策に就て

漢方醫學上より觀たる治療及豫防法　理事　矢數道明氏

鍼灸醫學上より觀たる治療及豫防法　理事　柳谷素靈氏

食養學上より觀たる治療及豫防法　賛助員　小出壽氏

右講演後參會各位の意見發表を大座談會の形式にて取纏め、本協會として斯の國民病に對する對策意見の集大成となさんとす。一般會員、各部役員は特に奮つて御準備を乞ふ。

日時　昭和十四年九月廿三日（土）午後六時より時間嚴守す。

會場　拓殖大學第一講堂（市電文理大前下車）

費所　金五拾錢也（當日會費の半金を以て忠靈顯彰資金に献納す）

本協會宛寄贈圖書

一、醫林改錯　二冊　上海　野邊　清氏

一、素問集註　六冊　同　野邊　清氏

一、靈樞集註　八冊　同　野邊　清氏

一、五種經驗方　一冊　北京　國醫砥柱總社

一、婦科秘方　一冊　國醫砥柱總社

一、程松崖眼科　一冊　國醫砥柱社

一、國醫砥柱　五六期　國醫砥柱社

一、日支民族會議　八月號　日支民族會議

一、神の日本　八月號　神乃日本社

一、人間醫學　八月號　人間醫學社

刺鍼による内臓穿孔の數例

龍野一雄

技術的にも學問的にも研究せられ益隆盛ならんとする鍼灸に對し現代醫家より重大なる過誤例を報告されるは斯界の發達上遺憾此上もないが、これは現代醫家と鍼灸家との抗指として觀察すべきではなく反つて鍼灸家が自己の内面的問題として深く反省すべき事柄と解すべきであらう。

第一例（胃穿孔）（臨牀の日本）（昭和十一年十一月）に朝鮮の鈴木信宏氏が「鍼醫による急性胃穿孔性腹膜炎」の表題の下に報告された例である。六歳の男兒で上腹部に疼痛を訴へたので食中りとして鮮醫が胃部に二三本刺鍼した所一向に輕快せざるのみならず却つて腹痛膨滿發熱衰弱等が加つて來たので、試驗穿刺をすると菊菊壁球菌を有する膿汁を得た。腹部は一般に強度に膨滿し至る所に壓痛があり、その他急性化膿性腹膜炎の症狀が具備してゐるので直ちに正中線にて開腹術を行つた所淡綠色の膿汁溢出し、胃前壁中部に小指頭大の穿孔を發見した。腸管は殆ど全部綠白色の厚い膿苔を被り互に癒着してゐた。此患者は術後三日目に死亡した。

鈴木氏は之に對し所謂黑血を出せば痛みはとれるといふ考の下に所嫌はずブリ〳〵と刺すからたまらない。小兒の薄い腹壁などは容易に貫通して胃袋に孔を明けるのは、當然であると評して居られる。たゞ此患者で奇蹟的であつたのは胃穿孔後二週間近くも生きてゐたことゝ、斯の如き汎發性腹膜炎を起してゐながら腸管麻痺による腸閉塞症狀なく持續的に瓦斯大便の排出があつたことであると鈴木氏は注意された。

此例について考へさせられるのは如何にも鈴木氏の言はれる通り小兒の腹壁は薄く且つ軟いものであり、併かも刺鍼に際し啼わめいて腹に力が入るだらうから胃も從つて膨滿し極めて容易に穿孔される可能性を持つてゐるとしか思はれぬ。さう云ふ條件を無視して刺鍼を敢行した所に過誤が生じ常識的注意を怠りさへしなければこの過誤は當然避け得らるべき性質のものであつたと考へられる。

第二例（腹部大動脈穿孔）　慶大外科の茂木藏之助先生が「日本外科學會雜誌」昭和十二年十月に「急性蟲樣突起炎」の宿題報告を發表された一節に五十二歳の軍人で蟲樣突起炎に罹りドウグラス窩膿瘍を形成し、入院の上保存療法を行つゝあつたが、主治醫に内密で鍼醫の大先生なるものが二名の弟子を連れて來て今夜は強い鍼を打つと云つて太い鍼を刺して歸つた。すると間もなく氣持が變になり次第に下腹部の膨滿を來し右下腹部に著明の浮腫が現れて來た。發熱腹痛も漸次加つたので開腹してみると流動性鮮血色の血液乃至半凝固性の血液が湧出し種々手を盡してみたが遂に二日目に死亡したので解剖に附した所、第四腰椎の高さに於て腹部大動脈に半米粒大の穿孔があつた。蟲樣突起は骨盤後方に密著して居て動脈穿孔とは何等因果關係を認められなかつた。

本例でも亦永く病臥してゐる患者だから腹部は陥凹してゐて、腹部大動脈は容易に觸知される筈である。たとへ觸知出來ぬまでも膊傍に大動脈がある位は當然知らぬ譯はなく、危險を冒して太い鍼を深く刺した所に過誤を生じ、併かも此過誤は絶對不可避の性質のものではない。腹壁に鍼を刺しさへすればよいと思ふは鹿を追つて山を見ぬ獵師の心理であらうがその結果は實に恐るべきものがある。

茂木博士は此症例を日本外科學會總會席上で報告し、非醫者の無責任な行爲を痛擊された。私も去る會合の席上この話をした所何等の質問や反響がなかつた。鍼灸家が無關心なのか俺はそんな眞似はしないと自負してゐるのか今以て私には判らない。

第三例（膽囊穿孔）　今月の「臨牀醫學」に小清水邦夫氏が「鍼灸の針誤つて膽囊を刺す」と題し、朝鮮に於て四十五歳の男が輕い腹痛のため鍼灸師に治療を乞ふた所上腹部劍狀突起より約三糎下方で正中線より僅か右方に於て長さ約十糎直徑約二糎位の大きな鍼を六糎位深く刺され途端に腹腔内で異常の激痛を覺えた。其後六―七時間たつと上腹部が再び痛み出し、嘔氣を伴ひ翌日には上腹部膨滿、呼吸困難、高熱、瓦斯大便の排泄停止、意識溷濁といふ重篤な狀態に陥つてしまつた。急性化膿性腹膜炎の診斷の下に開腹術を行ふと腹腔内には稍黄色の滲出液あり、輕度の肝硬變があつて膽囊先端に小穿孔を認め膽汁は上行結腸屈曲部より下方盲腸部の方に擴つてゐた。あらゆる手段を講じ幸ひこの患者は助かることが出來たに腫脹し肝臓下緣より下方に突出せるため刺鍼により貫通されて了つた不幸な例である。是は肝硬變に對する知識の不足、診察の未熟等より考へると當人としてみれば不可避なる過誤であつたかとも思はれる。是を前の二例に較べると前者は無謀であり、後者は無智より起つた過誤である。無謀と無智といづれが是か非かは扨てをきそれによつて惹起されたる結果は頗る重大なことになつたのは慄然たらざるを得ない。

鍼灸が目的論的には現代醫學と何等差別され得る所なきもたゞ方法論的に本質的な懸隔あるために法的には鍼灸術師として醫師より分離されてゐるのである。

輓近學術的にも制度的にも鍼灸に對し再批判が行はれんとしつゝある際に、前掲の如き不祥事が相踵いで報告されるのは眞に遺憾の極みだが、鍼灸家諸兄は斯の如き過誤を就中第三例の如きを學術的にも法律的にも充分に檢討されて（自己擁護のためばかりではない）苟くもせざらん態度をとつて欲しい、又假りに醫師と對診をしても堂々と自己の所信を開陳し得られるだけの見識と現代醫學の知識を養はられんことを切望して已まない。さうすれば醫師の免狀一枚を持つ持たぬの差ばかりでなく、鍼灸家の學問上、社會上の地位は求めずしてずんと向上されて行き、現代醫學と對立することが出來るであらう。

鍼灸が現代醫學の内に採入れられ、從つて現行制度を解消して行くか、或はその方法論的な本質的差違を堅持し且つ社會政策として獨立な地位を繼續し、從つて現代醫學と對立して行くか、我々も熟考して鍼灸界の將來に多大の關心を寄せてゐる。

三例の穿孔性腹膜炎手術所見を掲げて鍼灸家の立場から之を學術的に批判されんことを望む次第である。

本協會寄附者芳名

一金拾圓也　福島　星野　俊良氏
一金五圓也　東京　木村　長久氏
一金參圓也　東京　相川知以子氏

本協會贊助費拂込者芳名

一金參拾圓也　神奈川　植木　萬策氏
一金拾圓也　東京　小島七五郎氏
一金五圓也　東京　武藤　留吉氏

本誌代拂込者芳名

金壹圓貳拾錢宛
東京　永山　昇純氏
同　深堀　賢治氏
同　篠田　一作氏
同　玻名城孫位氏
同　野田一之函氏
同　林田　蕃氏
同　高橋　庄三氏
同　柳町　覺一氏
同　望月清太郎氏

金貳圓四拾錢宛
東京　宇野　秋生氏
高雄市　蔡　憲　文氏

金壹圓貳拾錢宛
八王子　神谷　卓氏
青森　高田　勝憲氏

メモ

○上海自然科學研究所の囑托として七月上旬より上海に滯在中の本協會理事清水藤太郎氏は九月十五日歸京の豫定。

○本協會、出版部委員として、本誌の編輯を擔當してゐた小柳賢一氏は去る八月二十二日應召、○○隊に入營した。

○本協會々員水戸市に開業の鍼灸家池田泰市氏は先般滿洲國鞍山市曉星寮一六九に轉居された。御健康と御發展を祈る。

○本協會宛每號寄贈を忝ふしてゐる赤坂區臺町十三神乃日本社（社長中里義美氏）にては九月八日言靈學の權威陸軍歩兵中佐山腰明將氏の戰況報告講演會を日比谷松本樓に開いた。

○偕行學苑第一回漢方講座終了者上原禎子氏は食養と漢方について獨特の研究を積み、近く社會的に大飛躍すべく計畫中なりと云ふ。

○東京本草會、報知新聞社共同主催、厚生省、東京府後援にて八月四日より同月十八日まで東京市新宿伊勢丹にて、日本藥用植物展覽會が開展され、頗る一般の注目を引いた。

編輯後記

○編輯を終つて、氣賀君が歸ると夜は可成り更けて、暗の底で、しきりにコホロギが鳴いてゐる。燈火親しむべき秋となつた。張り切つて大いに勉强しよう。

○同志久保田軍醫中尉より、支那の空が澄んで星がよく見えると云つてよこした。支那で天文學が早く開けたことゝ思ひ合して、面白い。星を眺めてゐると、心がゆつたりとして、アクセクしてゐる生活が可笑しくなる。

○同志中島藥劑官より現地報告があつたが、これは來月號を飾ることゝする。本誌へは新顔の戸部宗七郎氏は新進の鍼灸家で、最も將來を期待されてゐる一人だ。前月號の神谷氏、今月號の西澤氏も亦最も春秋に富む俊才だ。大いに頑張れ。（O生）